

須田康之著

『グリム童話〈受容〉の社会学——翻訳者の意識と読者の読み』
(東洋館出版社 2003年2月)

川勝泰介(京都女子大学)

グリム童話といえば、「白雪姫」や「赤ずきん」など私たちにはきわめてなじみ深い昔話の代名詞となっている。その童話集は、『子どもと家庭の童話』(Kinder- und Hausmärchen)と題され、1812年に初版第一巻が出版された。そして、その後幾度かの改訂作業を経て、1857年に出版された第七版(最終版)が「グリム童話」として今日もとてもよく知られている。

そもそもグリム兄弟が昔話の収集に乗り出したのは、フランス革命がおり、その混乱の余波がドイツにおよんだ19世紀はじめの頃である。まさにドイツ民族の危機的状況にあって、ドイツの民族的遺産を守らねばならないという思いが、兄弟の仕事を支えたと言われる。

本書は、このドイツで採取され編まれた世界的に有名な童話(著者の言葉を借りれば、「異国の文化財」)がわが国にどのように受容されてきたのかを探ることを通して、「日本社会に存在するプリミティブなレベルでの教育的価値意識を探ること」を目的としたものであり、著者の学位請求論文「文化財受容にみる教育的価値意識の研究—グリム童話を事例として—」をもとに加筆訂正されたものである。

三部構成(第I部「本研究の理論的検討」、第II部「翻訳者の意識—社会的レベルでの受容—」、第III部「読者の読み—読者レベルでの受容—」)からなる本書の特徴は、著者自身も述べているように、テキストの内容分析が中心であったこれまでのグリム童話受容の研究に対して、受け手側に焦点化し、受取の実態と受け手の意識を明らかにしたことにある。例えば、それは翻訳者がグリム童話の何を受け入れ、どのような書き換えを行っているかという実態の解明(社会的レベルでの受容)であり、またグリム童話が読者にどのように読まれているのか(読者レベルでの受容)という読者それぞれの読みの実態解明としてなされている。そして、これらを通じて、日本という社会的文脈の中でグリム童話という文化財がどのように扱われてきたかを探り、そのことからグリム童話の受容をめぐるどのような教育的価値意識や判断基準が働いたのかの解明が試みられている。

グリム童話を「子どものために書かれた教育の書」であるとする著者は、グリム童話が日本に受容される過程におけるヘルバルト学派の影響について述べ、採用されたグリム童話にみる教育的意図の日独比較を試みる。その結果、ドイツで選択されたグリム童話には、「同情」「応報」が、日本で明治期に紹介されたものでは「虚言」「勝利」が多く描かれているとして、ドイツと日本でのしつけの仕方や子ども観の違いが反映していることなどを指摘する。また、グリム童話自体には、超自然的反対者の話が多いのに対して、明治期の雑誌で紹介された話は、超自然的援助者(主人公の困難に魔力を持った援助者・動物・こびとが出現し主人公を危機から救出し、主人公も援助者に報いる)が最も多いことを指摘し、超自然的援助者の筋は、主人に対する忠孝を描いた話に脚色しやすく、明治期の日本人の心性(忠義・前

項・恩義を大事にする)に合致していたとする。

また、明治期に雑誌で紹介されたのべ 32 話の分析を通してグリム童話の変容に関する事例的考察を行い、その中に紹介者による思想性(教訓や処世訓)の付与があること、表現や挿絵における日本の変容などをあげている他、明治期以来今日までのおよそ 100 年間に単行本として出版された子どもの読物としてのグリム童話 210 冊、のべ 2606 話を材料として、異文化財が受容された際、時期ごとにどのような反応が生じるのかを数量的に検討するなどきわめて細かな分析が行われている。

これらの中で筆者がとりわけ興味を持って読んだのは、第 6 章の「狼と七匹の子やぎ」の子どもと成人の受容比較の調査結果である。とりわけ、保育所の年長児 52 名一人ひとりに著者自身が読みきかせを行っての聞き取り調査は、たいへんな労力を要したことだろうと想像される。

ご存知のように「狼と七匹の子やぎ」は、母親の留守の間に腹を空かせた狼に子やぎが次々と飲み込まれていき、最後にはその狼自らが腹に石を詰め込まれ、その重みで死を迎えるといった、他の多くの昔話と同様に応報の〈死〉という場面が描かれた教訓的内容の含まれたものである。調査結果によると、この狼が死ぬ場面について、成人では面白いと答えたものはほとんどいなかったのに対して、年齢の低い幼児や児童では面白いと感じている。また、幼児と児童は狼が死ぬことに賛成でしかも狼に同情していないのに対して、成人は狼が死ぬことに反対で狼に同情的であるという結果であった。このことから、子どもたちが物語そのものを楽しんでいるのに対して、大人は死に対するタブー意識が強く、子どもに対する教育上の配慮を強く意識していることがわかるなど、従来の児童文学において指摘されてきた特徴に共通したものが明確に出ている。

このように本書では、大人と子どもの読み取りにおける共通性と独自性のみならず、性別による子どもの読みの違いや日本・韓国・中国でのテキスト受容の異文化間における比較など数多くのきわめて興味深い調査結果が報告されており、また同時に、こうした研究の今後のあり方に対しても多くの示唆が与えられている。

ところで、本書では、グリム童話のわが国への受容過程において、ヘルバルト学派のチャーやラインなどの影響を指摘すると同時に、翻訳・翻案者が原典に何を付加し、あるいは何を書き換え削除したかの実態を明らかにすることを通して異文化財受容をめぐる教育的価値意識や判断基準を問題にしている。だが、明治期の受容においては翻訳者が必ずしもドイツ語の原典から直接翻訳しているわけではなく、例えば、これまでわが国におけるグリム童話の最初の訳者とされてきた菅了法にしても英訳からの重訳のようである。このような場合、英訳にされた段階ですでに何らかのフィルターがかかっていると考えられる可能性があり、このことはチャーやラインなどの場合においても同じことが言えるのではないだろうか。最後に、その点についての疑問が残ったことを指摘して、この稿を終えたい。